日本 G.A.P. ニュースレター

No.3

目　次

"円盤の試列"の検討 その2 ―― 1
第10章「聖書とUFO」 ―― 1
第11章「形而上学、心霊学、宗教」 ―― 2
アダムスキの近況 ―― 5
クリスマスのメッセージ ―― 5
C.A.ハニー氏のニューズレター ―― 7
声明 ―― 9
世界の変動 ―― 9
まじめな探求者のために ―― 11
各国協力者からの情報 ―― 12
編集後記 ―― 17

アダムスキの第三番目の著〝円盤の訣別〟の復要　その2

前回に引続いて第三番の復要をお伝えします。カッコ内の註は久保田によります。

『第十章　聖書とUFO』

（註。この章では、古代において宇宙人が地球を訪問していた事実が新・旧両聖書のいたるところに述べてあるとし、重要な個所を抜粋してそれらに解説を加えています。或る牧師が研究して、聖書中には宇宙船・宇宙人に関する記事が三百五十ヵ所以上もある旨をアダムスキに報告したということです。この場合の聖書というのは新約・旧約を合わせた意味だろうと私は思います）

◎　先ず、宇宙に多くの遊星が存在することを意味した個所は「ヘブル人への手紙、第一章第三節」に見えている。同様の概念は右の第十一章第三節にもある。最も端的な表現として名高い言葉は「ヨハネによる福音書、第十四章第二節」の記事「わたしの父の家には住まいがたくさんある。もしなかったならわたしはそう云っておいただであろう。あなたがたのために場所を用意しに行くのだから」である。この意味は、もしく間が別な世界に行けるほどに進化して、主が述べたとおりに生きることができるならば、主はそのとおりにしてくれるのだということをハッキリと示すものである。この事は同章第三節にも示されている。

◎　イエスは他の進化した遊星から霊魂のままでやって来て、この地球で生まれかわった人である。これは地球人の霊的向上を援助するために志願して来たのであって、宇宙人のなかにはイエスのように霊魂のままで来て地球人として生まれかわる人もあれば、肉体のまま宇宙船に乗って来る人もある。このことは「ヨハネによる福音書、第八章第二十三節」にも示されている。

◎　この地球では古代に右のような宇宙人たちが地球人のあいだに混って住んでいたけれども、一般人はこの事実を知らなかった。しかしこれに関しては「ヘブル人への手紙、第十三章第二節」の「旅人をもてなすことを忘れてはならない。このようにして、ある人々は気づかないで御使いたちをもてなした」という有名な一節がその意味を表わしている。現代でも殆どの人が気づかずにこの「御使い」すなわち宇宙人に路上で会っている。要するに聖書の歴史はくり返されているのである。

◎　円盤が母船を離れる光景の完全な描写が「イザヤ書、第六十章第八節」に見えている。しかし古代の語法は現代のそれと異なるために、母船を〝雲〟、円盤を〝ハト〟などにたとえている。「エゼキエル書、第一章」は円盤目撃報告としての驚くべき正確な物語である。ただし、エゼキエルという人は文章の途中で急に飛躍して別な事を挿入するクセがあったために文脈がはなはだ錯綜している。また古代人は方角を表現する適当な言葉をもたなかったために「四つの顔と四つの翼」という表現法によって「九くてあらゆる方向に面している」ことを表わしている。（註。エゼキエル書第一章についてはかなり詳細な解説が述べてあります）特にエゼキエルは三個の着陸ギヤーをもつ円盤に言及し、ドームの周囲の高いリングや四個の丸窓、底部の着陸球のことまで述べている。もちろん彼はこれらの空飛ぶ機械や内部の人間をすべて神や天使とみなしたのである。

◎　予言者エレミヤは「エレミヤ書、第四章第十三節」で母船を「雲のように見える戦車」と記している。

◎　「出エジプト記、第十三章第二十一節」には、イスラエルの民がエジプト人の部隊によって追跡されたとき、夜は〝火の柱〟で、昼は〝雲の

柱〃で導かれた旨が述べてあるが、これも宇宙機である。また右の才十三章と才十四章に用いられている〃主〃という言葉は宇宙人のことを表わすものである。

◎「列王紀下、才二章才十一節」に出て来る〃神の人エリヤ〃は、この世界に来ていた宇宙人の一人であった。彼の神秘的な行動は現代の謎の失踪事件の一典型である。

◎モーセはしばしば火の球または光る雲から語りかける〃人物〃とまじわった。「出エジプト記、才三十三章才九節、才十節」ではすべての人々がこの事件を目撃したことを示している。宇宙人は主として地球人が苦難におちいったときにコンタクトを行なっていることは聖書全体を通じて判明することである。右と同様の事件が「ルカによる福音書、才九章才三十四―五節」に述べてある。

◎「使徒行伝、才一章才九節」のキリストの昇天の光景は、彼が肉体のまま「雲に迎えられてその姿が見えなくなった」すなわち宇宙船で運び去られたことを意味している。

◎〃同某記〃(邦訳版一九七頁)の記事「聖書によると、地球人の寿命は上空を覆っていた雲が減って、人間が初めて宇宙の星を見たときに短かくなり始めた」という個所は「創世記」に見出される。すなわち人間が星を見たことに関する聖書中の最初の説明は「創世記、才十五章才五節」にアブラム(アブラハム)が天を迎いで星を数えるようにと命じられる個所である。雲がいつ去ったのかはよくわからないが、この雲の水分がノアの洪水を起し、その後空が澄んで来て、ノアとアブラハムの時代のあいだのいつ頃かに星々が見られた。かくて恐ろしい宇宙線が地上に降りそそぎ、人類の生命の期間は急速に縮まった。ノアからアブラハムまでは十代の期間があり、その間にノアの九百五十才からアブラハムの百七十五才に減少したのである。

◎ イエスの母マリヤ、さらにエリヤやエノクなども生きたまま宇宙船で別な遊星に連れてゆかれた人たちであった。

◎いわゆる十二使徒は、この世界でイエスを助けるために別な遊星から来て地球で生まれかわった人々である。しかし彼らは前世の記憶の一部かまたは全部を失なっていたと思われる。

(註。以上の他に古代における宇宙船と円盤の来訪に関する聖書中の記事を多数引用して、従来の聖書の解釈が全く誤まっていたこと、聖職者たちは聖書中の古代の事件を童話化していたこと、われわれはもっと聖書を正しく理解して遊星人の存在に気づき、イエスの言葉を生かした清純な生活をなすべきこと、などをアダムスキは強調しています)

『才十一章 形而上学、心霊学、宗教』

(註。この章は、霊魂、神秘主義、神智学、哲学、形而上学などの各語を定義し、現代はこれらの語が全く誤用されている旨を述べていますが、重要な個所なので概略では到底原文の意を尽くすことができません。ただ次の一節が私の心を強く魅きましたので原文のまま掲げます)

「以上に述べた真の意味に比較してみると現代の神秘主義は神秘的なものや形而上学などの真の科学の誤用以外の何物でもないことがすぐわかるだろう。人間は一夜でこれらの科学の理解力を得ることはできない。その知識を得るためには生涯の研究と生活とを必要とするのである。ほんとうの探求者は決して名声を求めることなく静かに生活し、学んでいることを探求し、応用する。このような探求者は目に見えない霊界と目に見える形態とのあいだの分離を認めようとは決してしない。彼らは物質的形態を伴わないで存在し得るということも認めない。すなわち、外形上の融合が統一体を可能にするということを認めるのである」

（註。傍点は私がつけたものです。右の意味は深遠ですが、要するにわれわれは外形の存在を認識してその型を知るべきであって、「外形なきものをむやみに神秘視してはならない」という意味になるようです。次いでアダムスキは種々の予言類やメッセージ類（霊界通信的なもの）に言及して大要次のように警告を発しています）

◎文字板、自働書記、恍惚状態などによる通信の受信は、すべて真実の宇宙人から来るものではない。これらは信ずるに足りないものである。

◎地球を統制する計画で宇宙人が大量に着陸するという約束が、いわゆる宇宙人情報として流れ、その実現の際は個人的に自分が世界の支配者になるように選ばれていると公言する人があるが、これはインチキである。そんなことは絶対にない。

◎或る悲劇的な大変動が発生するという"宇宙人警告"があり、"周波数を高めた人々"を宇宙船に乗せて救ってやるという約束もあるが、これもインチキである。真実の宇宙人はそんなことは絶対にしない。

◎宇宙人は地球人のなかの選ばれた少数の人々を救うために来ているのではない。彼らは地球人の宇宙にたいする実際的、科学的、哲学的知識を発達させるのを援助するために来ているのである。

◎文字板、自働書記、恍惚状態などの方法によって他の遊星の人間や神などから通信を受信したと信じている本人に罪はない。かかる体験は"潜在意識"によって生み出されるもので、それは睡眠中に見る"夢"に比較できるものである。（註。これに関して重要な個所を以下訳文のまま掲げます）

「人間の心は複雑な、自然の電子機械であって、自己誘導の恍惚状態は潜在意識にたいする開いたドアーとなる。この半催眠状態においては、潜在意識が哲学、UFOなどの世界的事件の秘密にたいして真先に充分な観察を始めると思われるのである。このいわゆる通信の受信者が自覚めたとき、本人はどこかの他の力が受信された情報の原因であると確信する。本人は普通の夢と恍惚状態すなわち霊媒の夢とのあいだの類似点を見きわめていないのだ」

◎日常生活中に心を通過する想念の多くは真実の宇宙の知識を含んでいることがある。これは真実のテレパシーであって、重要なものである。

（註。以下はテレパシーについての解説の要約です）

◎われわれはテレパシー能力を発達させるまえに"心"を完全に理解する必要がある。想念波動のよき受信者となるためには、まず個性を完全に排除することができねばならない。

◎人間の心はスポンジのようなもので、やって来る印象のすべてが浸み込むのである。心が常に習慣的に自己の個人的興味にのみつながっていれば、正確に想念を受けとることは不可能である。受信しようとすれば個人的な興味のすべてを完全に排除する必要がある。つまり"話し中"であってはいけない。電話で一人が一方的に喋りまくっている場合は相手の言葉が聴きとれないのと同様である。すなわち一般の地球人は心のなかで絶えず物事をあまりに考えすぎるのである。もっと心を静かな状態にすべきである。

◎わけもわからずに心を開放すると、かつて放たれた歴史上の事件に関する分類にみちた想念をキャッチすることがある。多くの恐ろしい通信やウソの約束などが受信されるのはこの理由である。

◎ゆえに真実の宇宙人は地球人にテレパシーだけでコンタクトを試みることはしない。なぜなら、右の誤った通信と真実の宇宙人からの連絡とを見わける能力が地球人にはなく、そのために混乱が生じるからである。

◎したがってテレパシーそれ自体だけを決してあてにすることはできない。（註。この理由は、催眠状態などによって受信される低級なメッセージ類も一種のテレパシーの分野に入るからで、このことは後掲のハニー氏の解説中にも述べてあります）

◎この世界には宇宙人をネタにした宗教団体が溢立したが、この態度は誤まっている。彼ら宇宙人は神ではないので、崇拝されることを望んではいない。

◎宇宙人に宗教はない。しいて宗教というならば、〝至上なる英知〟だけによって絶えず与えられる新しい想念と理解とをもって、〝自然〟によって教えられながら生かされる生活の科学である。

◎地球人は個人で考えようとしないで、既成概念を他から強いられてそれを丸呑みにしているだけである。（註。以下は訳文のまま）「人間はただ自分で考えさえすればよいのだ。自分の思想を自分自身だけのなかへ閉じ込めたり、他人が自分の思想を批判するのを許したりしないで、自分の思考を天地万物のなかへ没入させなければならない。誰もが自分自身の由建の仕事をやらねばならないのである」

×　　×

以上で「円盤の談別」中の第一部を終ります。次いで第二部へ入りますが、これは次回にまわします。第二部は世界講演旅行記で、これによりますとアダムスキが各国でひどい迫害を受けたりデマをとばされたりした各種の事件の実相が述べてありますが、かつて巷間に伝えられた報導とは内容があまりにかけ離れているのに注目させられます。特に、この第二部でアダムスキは〝秘密結社〟の存在を強調しています。これはアダムスキを社会的に葬り去って、一般大衆から円盤・宇宙人に関する興味をそらさせようとする特殊な組織で、巨額の資金を投じて世界的にアミを張り、巧みにデマをとばしたり、二七宇宙人を装ってはウソの情報を流したりして真実のコンタクトマンを抹殺しようとする一種のスパイ団であるものようです。この二七宇宙人によって仕立てられたコンタクトマンを通じてUFO研究界に混乱をひき起すのが彼らの常套手段で、日本ばかりでなく各国にも発生しており、その著しいものとしては昨年からニュージーランドで起った〝X氏事件〟、最近ドイツとオーストリアをかきまわした〝ハーバート・ニールセン事件〟古くは〝ラインホールド・シュミット事件〟（彼は一味二人から五万ドルをまきあげたサギにより逮捕され、刑務所に入れられた）その他があります。だまされる側にも手落ちがあったと云えなくもないでしょうが、しかし私の考えるところでは、やたらに運動資金を強要するコンタクトマンは先ず二七モノと見て差支えないようです。真実の宇宙人たるものが、信ずる人の側の弱点をつかんで経済的な困窮をもたらすような示唆を与えたりするとは思えないからです。地球人が金権主義による誤まった経済社会を造り上げてしまったのは致し方ないとしても、現代の段階では一応社会のバランスを保ち（維持）命の綱と頼っている〝金〟を個人的に強要してトラブルを生ぜしめるようなことを、云いかえれば、自らでなく他からの作用によって個人間または対社会的にバランスをくずすようなことをコンタクトマンに行なわしめるとすれば、それは兄弟でも特別な子の思いほうで、そんな者が宇宙空間から実際に来ているとしても（全然考えられぬことですが）およそ有難くない兄弟です。「いずれ救ってやるから」という約束などは無視してかかるほうが賢明だと私は思います。やはり自分の頭で考えて考え抜くといった態度が重要のようです。

アダムスキの近況

さて、アダムスキの「円盤の試別」の原稿が書かれ始めたのは一九六〇年のことで、この書の発行後は状況にかなりの変化があります。先ず彼は一九六一年五月にパロマーの財産一切を売り払ったアリス・K・ウェルズ夫人と共にケアリフォーニア州の或る場所へ移動しました。これは経済的事情によるもので、ブラザーの指令ではないということです。現在の住所は高原であり、これから先の落着く場所は未定となっていますが、どうもメキシコへ行くようになる模様で、そのことは後掲のメキシコの協力者マリア・クリスティーナ・デ・ルエダ女史からの書簡で明らかです。しかしアダムスキの提唱したG・A・P活動はその後も拡大し、現在は十七ヵ国に協力者がいて、アダムスキの言動を国内に伝えたり情報を交換し合ったりして活躍しています。一九六三年よりアダムスキは直接にニューズレターを各国協力者に送ることはやめて、そのかわりに宇宙哲学の研究の新分野を開いたということで、宇宙人とのコンタクトは今後も続けることになる模様です。それで各国協力者にアダムスキの情報を伝える仕事は米国のC・A・ハニー氏が行なうことになり、彼が代理人として新たに「宇宙科学ニューズレター」なるものを発行することに決まったそうで、すでにその第一号（一九六三年一月号）が私の手元に届いています。これは八頁からなる大判のパンフレットで、アダムスキ関係の記事はすべてこれに収録してあって、私にとっては実に貴重な情報でありますので、今回からはこのハニー氏のニューズレターの主要な記事を全訳なり大要なりで紹介することに致します。

このC・A・ハニー氏はまだ若く、かつてアダムスキと共に講演旅行などを共にした間柄で、円盤に乗ったこともあると伝えられていますが、人物について詳細なことはわかりません。京都で私が会ったバンスン氏はハニー氏を知っているということでしたが、くわしいことは聞き洩らしてしまいました。しかしハニー氏はもとアイダホ州のボイスという町の工場で無線技師として働いていた当時に、レイニア山脈上空で九個の円盤を発見して世界的に有名になった例のケネス・アーノルド氏の自家用飛行機を修理したことがあり、そのときまじめなアーノルド氏から体験談を聞かされたのが円盤に興味をもつようになった始まりだということで、その道ではちょっとした経歴をもつ人です。このハニー氏のニューズレターを紹介するまえに、アダムスキから直接に各国協力者へ送られたクリスマス・メッセージの全訳を次に掲げることにしましょう。

クリスマスのメッセージ

再び帰ることなくまさに過ぎ逝こうとしているこの年に、あなたがたが示して下さった忠実さにたいして衷心より御礼を申し上げます。私たちが自分背負っていた各自の責任を果たすのに、願わくば来たる年が万人の心のなかにキリストのあの謙虚な誕生が思い起されて始まりますことを。その年が万人の最大の宿願たる地上の永遠の平和と人類間の親善とをもたらさんことを。更に万人に宇宙の父の祝福が与えられんことを。来たる年、私たちがよりよき奉仕いたらんがために、崇敬と謙譲と憐れみとをもってひざまずかんことを。

現代のこの最も重大な時期に創造者にむかってあなたがたが示された忠実さにたいして、ブラザーズにかわって私個人から感謝の意を表するものです。今まさに夜明けを告げようとするその年は、あいまいな過去

十二ヵ月間に私たちが経験してきた忍耐力にたいして報いるでしょう。その忍耐力は、宇宙計画の成行きのかげに私たちの住む二の遊星が他の姉妹遊星群と同様にその計画と一体になるであろうことを確実に立証しています。神は不可思議な方法でそのさまざまの奇蹟を啓示しようとしています。私たちが云えることは、〃地獄の王〃がそのアゴでただ私たちをむさぼり食わんがために襲いかかった如く、私たちは現代の最もわけのわからぬ時期の一つを通って来たという事実です。しかし忠実さと勝れみとにより、個人的な関心を犠牲にして私たちはその試練によく耐えてきました。しかしこれで終ったのではありません。その獣は再び試みるかもしれないからです。その最初の試みとしてそれは三名の忠実な協力者を食ってしまいました(註。二七宇宙人を信じてG・A・Pから離れた人たちを意味します)。これまでにない大いなる断固たる態度により、また真実なるもののみを求めて、それによって私たちの努力に混乱を導き入れないようにして、その地獄の王に二礼以上誰も食われないようにしようではありませんか。私たちはへビのように賢明に、ハトのようにおだやかでありたいものです。そうすれば全能の神は私たちと共に在るでしょう。以上が皆さんへの私のクリスマス・メッセージです。

警告!!

私はロサンジェルスへの旅をちょうど終ったところです。別な太陽系から来た宇宙人だと称する二人の男が私に近づいて来て、私たちの活動を讃え、彼らの本部へ一緒に来ないかと誘いかけてきました。しかし私は「行くな」という何かの声が響いたのを聞きました。その夜私は二の太陽系内の真実の宇宙人と会見しました。そして次の事実を知ったのでした。すなわち前記の二人は宇宙人ではないこと。しかし彼らは宇宙活動のすべてに精通していることなどです。もし私がついて行ったならば彼らは私を拷問にかけてその結果私は無理に書類に署名をさせられ、そのために私ばかりでなくUFO計画のすべては信用を失なうことになったかもしれません。察するところ私が主な目標になっているようですが、そのゆえに彼らは私たちの計画目標に努力が傾注されないうちに先ず私を失墜せしめる必要があるのです。ルーシーが私のもとを離れたと声明して以来、ありとあらゆるデマや脅迫が私のところへ来ています。そんな手紙類の殆どを私はゴミ箱のなかへ投げ込みましたが、一通だけは保存しています。その手紙には、もし私がルーシーを一人にさせないならば彼らは私の顔を台無しにしてやるとあります。どうやら、これはルーシーの友人たちのようです。創造者のために帰って来たらどうかと私はルーシー宛に手紙を書いていたところです。きっとルーシーはこのことには関係がなかったのでしょう。しかしその離反によって彼女はサイレンス・グループに絶好の活動場所を提供したために、彼らは巧みにそれを利用しています。それで私がありたがたに注意したいのは、二のような事態があなたがたにも起らないとは云えないということです。なぜなら彼らはきっと私たちの各グループを破壊できるところではどこでもそれをやるかもしれないからです。彼らは徹底的にやるでしょう。彼らがやめざるを得なくなるような方法は一つあります。それはルーシーが帰って来ることです。そうすればデマや脅迫へのドアーは閉ざされるでしょう。今のところこれは望みないように見えます。もし事態が早急に変化しないなら私は別な手段を講ぜざるを得なくなるでしょう。たとえそれが他の誰よりも私を傷つけることであっても——。しかし私は二の混乱を続けさせはしないつもりです。したがって如何なるデマに基

づいて如何なる行動をとられようとも、そのまえに先ず私宛に手紙を下さい。私が今持っている、疑事の出せない例の手紙にたいして、とにかく私は何らかの援助を得る必要があるのです。

一九六一年十一月二十四日

ジョージ・アダムスキ

各国協力者名位

C・A・ハニー氏のニューズレター

次にC・A・ハニー氏のニューズレターについて説明しましょう。この第一頁には社説が掲載されており、それによりますと、ハニー氏がニューズレター発行の仕事を受けついだ理由として目下世界中に流行している霊的感情的メッセージ類による混乱を排除すること、アダムスキの体験はあくまでも肉体的なコンタクトによるもので、実証的な現実的な方法によって宇宙人の存在を認識せしめるようにしてきた彼の努力にたいして大いに援助する価値があること、彼はブラザーズにたいして新たに歯磨の奉仕を始めたことなどが述べてあり、また一コンタクトマンがサギ罪により逮捕された事実をあげて、アダムスキがかかるいかがわしい輩と根本的に異なることを強調しています。これについてハニー氏は次のように云っています。「当然われわれは正しいコンタクトをした人とそうでない人を知っている。しかしここで氏名を挙げることは不適当であろう。宇宙人問題などでサギをするような人は自らの首を締めるようなものである」このサギ男とはシュミットとのことであって、それはウィーンの協力者ドラ・パウエル女史から私宛の書簡で明らかになりました。

第二頁は哲学の欄になっていて、ここでは広大な宇宙を一体何者が作ったのかという問題から、無神論、汎神論、有神論の三つをとりあげて検討し、結局この三つはみな同じようなものであると述べて、これらの論法で宇宙や物質の起源を解明することはできないとし、最後に次のように結論づけています。

「ただわれわれは次の事を知っているだけである。すなわち、あらゆる現象、あらゆる科学上の法則、物理学・化学上の法則の背後には一つの因が存在するという点である。あらゆる〃結果〃はその奥に何かの〃原因〃をもっている。原因なくして結果は起り得ない。われわれは万物のための〃一つの最初の因〃を認めねばならない。この〃最初の因〃の性質や起源は人間にはわからないのである」この論説は未完で、次号に続きます。

第三頁は科学の欄で、ここではアダムスキが早くから述べていた宇宙の実態がロケット類によって次々と確証された事実が列挙してあります。特に興味があるのは、アダムスキの第三著で、太陽が〃陽〃の放射線を放射し、それが陰電荷を帯びた三個のアステロイド帯に吸引されて、最遠距離の遊星にも地球と同様の熱と光が得られるという説明がされてあるのにたいし（この書の原稿は一九五〇年七月二十四日に出版に渡された）、エナリタス・ハースト・ニューズペイパーズの科学部長G・B・ラルが一九六一年八月二十日付のロサンジェルス・エグザマイナー紙に次のような記事を載せていることです。（引用）

「陽子は水素の原子核である。各陽子は陽電荷を帯びた微粒子で、いわゆる太陽嵐となって太陽から飛び出るのである……この微粒子は地球の大気の最上層を変化させる」そしてその証拠として最近のロケットの新発見績をラルは列記しているということです。

第四章は、アダムスキがハニー氏にG・A・Pの仕事を申し渡したことを述べた声明文と「世界の変動」と題する論文が載っていますが、重要ですから両方とも全訳をあとで掲げましょう。

第五章及び第六章は質疑応答欄で全部で七つの質問にたいしてハニー氏が懇切な解答を述べており、これもかなり重要なのでぜひ全訳を表せたいのですが、残念ながら時間的余裕がありません。ただ主なものの概要だけを記しますと、先ず「アダムスキはなぜ彼の第三著に〝円盤の謎〟という題をつけたのか。これは円盤を縁が切れたことを意味するのか」という質問にたいして、ハニー氏は、そうではない。宇宙人との（ブラザーズ）コンタクトは続けるが、別な研究活動に入るために、一応円盤そのもののPRから手を引いたのだと述べ、地球には宇宙人に関した霊界通信や家教団体が濫立したためにブラザー側も計画を変更せざるを得なくなり、現在宇宙機群は引き揚げつつあるので今後はコンタクト・ケースや目撃事件などは減少するであろうが、しかしブラザーたちの着陸は依然として行なわれており、ますます多くのブラザーが地球人のあいだに混って生活しながら地球人をひそかに援助しているのであると説明しています。また、「心霊現象を研究していた人々がアダムスキの書を読んでから急速にアダムスキ攻撃派になったのはどういうわけか」という問いにたいしては、ハニー氏が次のように答えています。

「次の二、三の事柄が理解されるならば、われわれと心霊現象とのあいだに何らの摩擦はありません。先ず、われわれは真実の霊媒と霊界通信とを相手に挙るものではない。一夜にして神との霊交を体験したと称するいかがわしい人たちがいることを残念に思うものです。真実の霊媒や霊界通信は神秘主義を円盤と結びつけることはしません。宇宙人は如何なる通信にも霊媒や霊界通信的手段を用いることはしません。テレパシーは霊界通信の一部ではなく、霊界通信がテレパシーの一部なのです。この意味を次のように説明してみましょう。ケアリフォーニアに生まれたA人のすべてはアメリカ人ですが、アメリカ人のすべてがケアリフォーニア人であるとは限りません」次いで、テレパシーには六種類あるとし、三種類は全く地上的な性質を帯びた概念の受信であって、役に立たぬものであり、あとの三種類が宇宙的な真実のテレパシーで、これを発達させる必要があるのであって、詳細はアダムスキ著「精神感応」にあるとしています。次に重要な質問として「核戦争または大変動が起った場合に宇宙人（ブラザーズ）はわれわれを救うのか（選ばれた者）」にたいしてハニー氏は次のように述べています。

「そんなことはありません。何らかの救助がなされるならばそれは見捨の法則にしたがったことにはなりましょう。しかしブラザーズはこの点においては自然の法則にしたがうのです。ちょうど太陽が正しい者にも不正な者にも等しく輝くように、彼らがもし救うとすれば選ばれた少数の人だけではなく、民族、信念、皮膚の色などにかかわらず万人に及ぶ筈です。」そして各遊星や各人は自分で自分の問題を解決すべき運命をもっているので、特定の選ばれた人だけを救うことにすれば、この自然の法則を破ることになるのであると云っています。ただブラザーズが行なっている援助の一つとしては汚染した大気を清浄化させることがあり、これはいわゆる〝緑の火球〟として知られている物によって行なわれているということです。これからみますと〝緑の火球〟は円盤ではなく、放射能を除去する装置であるようです。その他にも有意義な質疑応答がありますが、ここでは省略致します。

次に第四章に掲載されている声明と論文の全訳をかかげましょう。

声明

宇宙哲学と地球科学を伝えるための別な奉仕の分野に入りました私、ジョージ・アダムスキは、私のこれまでの仕事をC・A・ハニー氏にゆずりました。ハニー氏は米国で私の代理人になります。私が或る場所に落着いたならば、ときどき彼に情報を与えますので、それによって彼は現在の出来事に精通している人々に関心を持ち続けさせることができます。

私は宇宙の[illegible]によって新しい任務が与えられ、またC・A・ハニー氏に私の仕事の当初の部分をゆずり渡すことについてブラザーズの承認を得ました。このことは、このきびしい時代において如何なる不測の事件が起ろうともそれにたいして警戒するために必要な自由が私に与えられることになります。私はこれによって"宇宙の諸法則"に親しく接触して働くことができ、そしてその諸法則に関して知識を求める人々に伝えることができます。自らの宇宙的な運命を遂行しようと望む人々を導くために、来たるべき時代に多くの人々が必要となるでしょう。

共にこの仕事を援助しようと望まれる人々のすべてがハニー氏と一緒にその能力のあらん限りを発揮して協力されることを切望します。彼は信頼にあたいする人物であり、あなたもきっとそうであると思います。あなたは彼を通じて常に私と連絡することができます。

一九六一年八月二十四日

ジョージ・アダムスキ

世界の変動

ジョージ・アダムスキ

今や世界には多くの変動が起りつつありますが、これは数年間続くでしょう。これは地球及び太陽系自体すらが過渡期にあるためです。地球物理学的な発生だけでなく、社会自体にも多くの変動が発生するでしょう。社会的に発生する諸変動は種々様々のものとなるでしょう。

人間が求める確実さや心と世界の平安などは過渡期が終るまで実現しないでしょう。最もよく知られている人々は地球がその姿勢(ポジション)を変えつつあることを知っていますが、同じ事が太陽系にも発生しつつあることまでは知っていません。この太陽系内の全遊星はその影響を受けるでしょう。遊星のなかには他の遊星よりもはるかに甚大な影響を蒙るのもあります。地球は大影響を受ける遊星群の一つです。それは逆立ちをして立っている人間にたとえてよいでしょう。血液は頭へ逆流し、肉体内の全器官はねじれるかもしれません。あらゆる分子は新しい姿勢を求めるようになるでしょう。地球がそのとおりなのです。

地球は一定の点にまで緩慢な変化を経ようとしています。この新しい姿勢に向って地球が動くにつれて、地球内部のあらゆる元素も同じ目的に向ってそのポジションを変えてゆきます。人間もこの同じ無機物也元素で成り立っているので、やはり影響を受けるでしょう。人間が之候や大気中の微妙な変化に感応するように、来たる諸変化にも感応することでしょう。自然が発展段階を経ている限り種々の不安感が人間の心のなかに拡がるでしょう。地球の変化が終ったとき人間は不安感が終ることがわかるでしょう。

以上が、未来に起ると云われる事件について多くの異なる予言類が行なわれる理由です。二十五億の人間が、発生するだろうと考えている物

書について、その予想の想念を放射しつつあります。殆どの予言類はこの想念の影響にすぎません。人間の心の何たるかを殆ど理解していない人々は、右の想念を感受してそれが宇宙人または神から来るメッセージであると思い込みます。この想念群のうちのわずかな部分だけは当然正しいものであるかもしれないので、人々はワナにかけられ、感応者が現実の事件、または宇宙の創造者とコンタクトしているのだと信ずるわけです。地球自体が滅亡するまでは、かかる幻想のために未来の予言類は起り続けるでしょう。地球が滅亡ならば人類も滅亡でしょう。

一方、理性の不安定な状態のありだに大変動が発生するかもしれません。一体何が人間に影響を及ぼしているかということに気づかなければ、人間は自己の周囲に伴なうさまざまの事象を正そうとして悲惨な事を仕出かすかもしれません。少し手控えて、実際に何が起りつつあるかを理解すれば、人間は自然をして妨害なしに思い通りに行なわしめることができるでしょう。逆説よりも未来において人間により大きな奉仕をさせるべく、物質の元素は変化しつつあると云ってよいでしょう。以上が、大抵の予言は大修事を述べるにすぎないのに、なかには大いなる未来を告げるものもあるという理由です。この大修事というのは右に述べたような気違かと知識の欠乏によって起る大修事です。

この大修事が現在世界中に発生しつつあることはおわかりでしょう。個人や国家間に起りつつあります。大抵の場合は不愉快な事態が存在しますが、しかしこれは進化がなされるための唯一の方法のように思われます。自然は物事を行なうのに自らの方法をもっていますが、人間はそうではありません。自然はときとして人間にとって不愉快と思われる多くの物事を行ないます。これは自然の法則の間違った理解のためにそう見えるのです。肥料の匂いは不愉快ですが、キング・ソロモンは次のように云っています。「肥料から百合は生長する」

現在何が発生しつつあるかを理解するためには、あなた自身を感情的な混乱にゆだねないようにすることです。冷静にして、私たちの周囲に起る多くの"予想"にまき込まれてはなりません。

美しい牧草地に達するには、私たちは沼地を越える必要があります。人間は沼地を越えるまでは決して牧草地を楽しむことはできません。私たちは今日沼地にいると云えます。私たちは善と悪の両方から成り立っているあらゆる種類の主義・思想にとり巻かれています。新しい思想が人類にその役割を果たすために生まれ出づる前に古い思想は姿を消さねばなりません。賢者はその変化の各行程を観察するでしょうが、愚者は血に狂って自らを破壊するでしょう。

さて、ハニー氏のニューズレター第七号はアダムスキの著書の紹介欄ですが、ここにはアダムスキの第四番目の著書 Cosmic Philosophy（宇宙哲学）なる書の紹介記事が出ています。これは彼の著書"精神感応"の続篇ともいうべきもので、彼の打樹てた哲学の金字塔として燦然たる光芒を放つもので、この方面の探求者には必読の書とされているもののようです。私自身はまだ読んでおりませんが、いずれ入手するつもりでおりますので、その際は全訳をお伝えしましょう。これを読めば、"精神感応"で判然としなかった部分もよく理解でき、自己の思考の土台として無限の価値をもつことになると云われています。次にこの書にたいするハニー氏の紹介記事を掲げます。

まじめな探求者のために

アダムスキの最新の書〝宇宙哲学〟は彼の偉大な書の一つです。〝精神感応〟と共にそれは哲学上のテキストブックになるもので、目下つくられつつある宇宙哲学の各研究団体によって用いられるようになるでしょう。

〝宇宙哲学〟はいつまでも誇りをもって所有される書です。全部で十九章から成っていますが、その主なものは次の通りです。「知覚と概念」「意識とは何か」「肉体、心、意識」「表面意識と潜在意識」「信念」「生まれかわること」「感情のバランス」「自由意志または自己催眠」「弛緩」「古代の知恵」「現代の進化」「遥去の文明」その他です。

この書は書店にはありません。宇宙の兄弟によって示された哲学的、科学的な線に沿って向上することを望むまじめな研究家のための書です。宗教・政治には関係なく、地球人の生活にたいする指導書ともいうべきものです。

アダムスキはこの書について次のように云っています。「これは自己啓発の指導書すなわち一種の個人用バイブルです。正しく応用されるならば有益になるはずで、それによって読者は知識の分野で生長し続けるのに他の何物も必要なくなるでしょう。実際、より深い知識はなおも求められるべきですが、しかし確固たる土台がなければそれを望むことはできません。その土台を私はこの書によっておわかちしたいと思います。この書に含まれている知識によって読者はきっと価格以上のはるかに大きな価値を見出されるでしょう」

ニューズレター第八号には雑報の他に「コンタクト事件を見分ける法」

上梓する運びハニー氏の名で載っていますので全文を次に掲げます。

コンタクト事件に関して誰が真実のコンタクトマンで、誰がニセモノであるかという質問が多数の人から私宛に（ハニー宛に）来ています。私がこの回答をできない理由がこのニューズレターの社説で述べてあります。ジョージ・アダムスキは私の支持する唯一のコンタクトマンです。このことは他のコンタクトマンのすべてがインチキ師だということを意味するものではありません。しかし私は多くのコンタクトマンがインチキ師であるという直接の証拠をもっています。宇宙人は私たちに誰が真実のコンタクトマンで誰がそうでないかを話してくれています。

人々のなかにはコンタクトしたと称する人もありますが、その人の陳述が真実かそうでないかを知る方法を私はもっていません。たとえその人が真実のコンタクトマンであったにしても、確証を入手しないことには私は誰をも支持しません。ただ宇宙人の許可を得て私が確実に云えることは、霊的なコンタクトは宇宙人との真実なコンタクトではないということです。それは本人以外には誰にとっても意味のない精神的な体験です。このような体験は発生していても宇宙人とのコンタクトではありません。

いわゆる宇宙人からのメッセージと称されるものの内容を判断する方法があります。もしそれが分裂、非難、嘲笑、予言、個人的報酬の約束、恐怖、不安な感じ、不満、などを含んでいて、宇宙の法則にしたがったものでなければ、それは真実の宇宙人から来たものではないので、無視すべきです。一方、コンタクトマンから出た情報が宇宙の法則にしたがっていて、自然の法則と一致していて、前記の事項を含んでおらず、自己の内に調和の感じを与えるものであるならば、その価値を認めて、ためになるという信念のもとに判断をすべきです。

各国協力者からの情報

ハニー氏のニューズレターの紹介はこれで一応おわりとしまして、次に一九六一年十一月、十二月中に私宛に(父保田宛に)届いた世界各国からのニューズレター中、主なものを掲げます。

◎メキシコ　マリア・クリスティーナ・デ・ルエダ女史

この人からはしばらく連絡がと絶えていましたが、十一月二十六日付で久方ぶりに通信があり、それによりますと家庭内に病人があったとのことで、ごたついていたということでした。しかしアダムスキのG・A・Pには以前にもまして情熱をもっている旨が記してあります。またアダムスキがメキシコに居を移らしいことについて次のように述べています。「アダムスキ氏はたぶんメキシコに住むようになるでしょう。もっともまだ確かなことはわかりませんが――。私たち家族一同はアダムスキ氏を非常に敬愛していますので、彼がメキシコに住むのならばできる限りのことをして彼とアリスとの面倒を見るつもりです。アリスはとても素的な婦人で、アダムスキのために大いなる奉仕をつくしてきた人です」大体アダムスキはメキシコを非常に好んでいるらしく、これまでに何度もメキシコを訪れており、クリスマスは大抵マリアの家で過ごすことになっており、今度のクリスマスもそこへ行く予定になっているということでした。その他に、マリアは三年前に起った或る不思議な事件を詳述しています。すなわちテレパシーによってマリアと語り合った一人の紳士に関する事件です。大体マリアはこれまでに気づかないで三人の宇宙人に会ったことがアダムスキにわかっているということです。このニューズレターと共に私宛の私信が添えてあり、それはきわめて力強い言葉で述べられた激励の辞でした。

◎デンマーク　ハンス・ピーターセン大尉

ピーターセン大尉は欧州きってのG・A・P活動家で、現在スカンディナヴィアUFO研究会を主宰し、二十二カ国六十六カ所と連絡を続けている旨が、十二月一日付のニューズレターに述べてあります。彼は近い内に米国へ派遣され、約二カ月をそこで、すごすごいだにアダムスキに会う機会をねらっているということです。デンマーク空軍の若き有能な人材です。

◎フランス　シュザンヌ・ソニエー女史

ソニエー夫人は日本に格別な興味をもち、私にたいしてはこれまでにずいぶん私信を寄せられました。彼女のニューズレターはいつも流麗なフランス語で書かれていて、英語はあまり使用されていません。英語はどうも苦手のようですが、このことはメキシコのマリアも云っています。やはり言語というものがテレパシー以前の問題であることを有証する次第です。シュザンヌは十二月五日付ですばらしくきれいなカレンダーを送ってくれて、その手紙にはCBAのことに関してその後どうなったかというようなことが書いてありました。アダムスキの欧州講演旅行のときは親しく彼の世話をやいたことがあり、また先般はクリシュナムルティーの講演も聞いたということでした。パリから発行されている有名な雑誌Le Monde et la Vie(世界と生活)を毎月送ってくれます。彼女は日本のキモノを一着もっているそうで、かわりに私はキモノに関する日本の写真集と文献を送ったことがあります。四十九才の知性高い婦人です。

◎濠州　ロイ・ランド・パール・ラッセル夫妻

ラッセル夫妻からは十月二十一日付で彼らの出しているレター・トー

クオ十一号及び各国協力者宛のニューズレターと今回新たに出したUFO研究誌〝グローバル〟を送ってきています。ロイは濠州で最も活躍しているG・A・P協力者で、またクイーンズランド円盤研究会のD・R主任をも兼ねている人です。彼の文章には興味ある記事が満載してありますが、次にその大要を箇条書にしてみましょう。

1. 濠州のわれわれは先般九月六日夜、ブリスベーン市公会堂で円盤講演会を開き、大成功を収めた。特に、ニュージーランドの目撃事件で一躍有名になったジル及びブラウニング両神父の講演は聴衆に多大の感銘を与えた。この席上、司会者の或るテレビ関係者はアダムスキの体験と写真を讃えて次のように挨拶した。「数年前アダムスキはこの公会堂で講演を行ない、多数の人から嘲笑を浴びましたが、今日ロケット機によって彼の体験の真実性が立証されつつあります。調査するよりも嘲笑するほうが容易ですが、しかしそれは有益なことではありません」（註。この講演会のポスターが一枚送られてきました）

2. アダムスキの〝円盤の識別〟中に、〝太陽の子〟の著者であるマルセル・F・ホメット教授がアルジェンティンで古代の遺跡からアダムスキの場合と同じ象形文字を発見したことが述べてある。オランダのG・A・P協力者レイ・ダクィラ女史は先般このホメット教授に会ったが、それによると、教授は考古学者で特にアトランティス大陸に関する研究を行なうちに、古代文明において他の遊星から宇宙船が飛来していた事実に関する証拠を多数発見したが、もともと円盤の事に無関心であるので敢に介せずにいたところ、たまたまアダムスキの〝実見記〟に同じ象形文字の写真が載っていたのを見たことから俄然UFOに興味をもつようになったという。教授の態度は非常に科学的である。

3. ニュージーランドG・A・Pは、一九六一年六月二十四日付の新聞〝オークランド・スター〟紙から次のような記事を転載した。すなわち、ケアリフォーニアの世界的に有名な地震学者ユージン・ベニオフ教授の研究によると、米国で三番目の大都市ロサンジェルスは近い将来に大地震に見舞われる運命にあるという。これはケアリフォーニアには深さ五マイル、長さ二千マイルに及ぶ割れ目が地表にあって、一方の土地は毎年二インチほど北方へ動き、片方は南方へ動くために割れ目の下で激烈な土地の押し合いが起っていて、それがスリップすると大地震になるのだと教授は説明した。一八五七年にもロサンジェルス地区で地震が起ったことがあり、そのときは地面が二十一フィートも隆起した。注目すべきは、この予言が心霊的なものから出たのではなく、ノーベル賞受賞者を八人も出した理工科大学の権威者による科学的研究に基づいた発言であるという点である。

4. ソ連の学術誌〝プロダクト・エンジニアリング〟（一九六一年四月三日号）によると、ソ連は目下レニングラードとオムスクでテレパシーの実験を行なっており、如何なる国よりもこの研究で進歩しているという。その発表によると「脳から発せられる波動を増巾する装置を作る可能性はある。これによって（この波動によって）人間同志で通信を行なうことができる。また、脳から発せられる波動に似た人工波を作り出して人間の精神作働きに直接の影響を及ぼすことも全く可能と考えられている」と述べてある。しかしアダムスキが云うところによると、米国の科学者も将来の宇宙旅行にそなえて、個人的にテレパシー通信の実験と訓練を続けているという。

◎オーストリア　ドラ・バウエル女史

十二月十五日付でウィーンから送られたドラのニューズレターは、各国協力者宛に発せられたUFO関係の質問線や彼女の見解などが述べてありますが、繁雑なためにここでは省略します。ただ、レーゲンスバーグの青緑バーバート・ニールセンのコンタクト事件を少し紹介しています、これは全く心霊的なもので問題にならないとしています。最後にドイツの雑誌〝レヴュー〟の十一月二十六日号のきわめて興味ある記事を紹介していますのでここにその大要を記します。

1. ソ連はこれまでにロケットや人工衛星の打上げで多くの失敗を重ねている。特に人間衛星では少なくとも三人の男と一人の婦人を宇宙へ送ったが、しかしこれは極秘にされている。これについて確証を握っている人は、ソ連の人工衛星の電波を聴くことを専門にやっているイタリア人のアマチュア無線家ジェディカ・コルディグリア兄弟である。
2. 一九五九年二月に先ずソ連はセレンディー・シバーリンを宇宙へ出発させた。彼は二十八分間信号を送ったがその後絶えた。
3. 続いて一九六〇年十月十一日にヴェテラン航空パイロット・ドルゴフを打上げた。これはフルシチョフが十月十三日に国連へ出席する際の切り札とみられたが、しかし三十分後にドルゴフの信号も停止した。
4. 同年十一月二十八日にコルディグリア兄弟はソ連の人工衛星の周波数で発せられた〝S・O・S〟のモールス信号をキャッチした。
5. 一九六一年二月二日夜九時五十五分から、ソ連の人工衛星の二種類の周波数から成る電波をキャッチした。この内の一方の電波はとぎれとぎれの声であったが、心臓の鼓動が激しくなるとともに十九分後にその男の困難な呼吸音が消えた。その時刻は十時三分であった。
6. 同年四月七日には別なエイスであるソボドフスキーが出発したが、数分後には無線機のすべてが停止した。
7. ガガーリンは四月十二日に出発した。
8. 五月十七日に数発が打上げられた。七日間一人の男と一人の女の声が聴かれたが、突然男が叫んだ。「何かがある……困難になってきた……」そしてその声は消えてしまった。
9. チトフが打上げられたのは実は六月十七日であって、発表されたのはその六日後である。

◎米国　アグニュー・バンスン氏

十一月に私が京都で会ったバンスン氏は十二月十三日付で書簡をよこしましたが、それには新聖書の謝辞と共に彼が書いた小説を一冊別便で送ったとあり、その内容はフィクションであるけれども、いつか必ず起る事件だと説明して、私が何か異常な体験をしたならばぜひ知らせてくれとつけ加えてありました。

◎米国　ルーシー・マクギニス女史

ルーシーから美しいクリスマスカードに添えて次のような挨拶が送ってありますのを私は後難な気持で読みました。「私たちが誰をも非難することなく、万人のなかにキリストを見るように努力するならば、私たち自身や同胞ばかりでなく宇宙人にたいしても最上の奉仕をなし得るというのが私の確信ですー後略」これからみますとルーシーは決して円盤問題の興味を失っていないことがわかりますが、その真意は謎です。

⊙ニュージーランド　　フレッド・アンド・フィリス・ディクソン夫妻

ディクソン夫妻はG・A・P協力者として陰分活躍してきた人で、その矣払は心から敬意を表するものですが、昨年夏頃から〝X氏事件〟なるものを紹介してその立役者になったために、世界のG・A・P協力者間で俄然論議の的となってきました。この事件について詳細を述べればそれだけで五、六頁を要しますので、ここでは概要をお伝えします。

1. 数年前よりティマルーに住むディクソン夫妻の親友であるX氏の家に不思議な手紙が舞い込むようになった。その文面はこの地球以外から人間が来ていることをほのめかし、手紙の主がその一人であることを記していた。しかしこの事は極秘にされ、ディクソン氏以外の誰も知らなかった。

2. 一九六一年の夏、この謎の人物はX氏に指令を送り、全世界の四聖関係リーダーたちが一定の日時に一斉に黙念すれば、テレパシーによりリーダーたちに適当な指示を与える旨を伝えたので、フレッドが各国に檄をとばしてそのことを依頼した。しかし各国では疑問をもつ人がかなりいたし、指令通りに黙念をしたが皆目の反応も得られなかった。

3. しかしこの宇宙人らしき者はその後もX氏宛にメッセージを送り続け、自分たちを信ずるようにと主張し続けた。フレッドはこれを信じて重視し、その後もニューズレターでこの事実が真実であることを訴え続けたために、各国協力者間で問題となり、一体彼はアダムスキの支持者なのかそれともX氏の代弁者なのかという声が高まり、このところ疑問の人物となってきた。

ところでフレッドから来たニューズレター第十七号（十、十一月号）によりますと、依然としてX氏事件を重視した記事で埋められていますが、そのなかで見逃がし得ないのは、一九六一年十二月十五日にX氏が受けとった手紙第八号及び第九号の内容を掲載していることです。これも宇宙人と名乗る人物からの一連の手紙の一部なのですが、その第八号によりますと、次のようなことが記してあります。

「われわれはあなたがたの太陽系から来たものではなく、地球人が射手座と呼んでいる星座の近くの或る太陽系から来た者です。地球の衛星である月には如何なる種類の生命も存在しません。そこには空気も水もないからです……あなたの都市の上空で私たちが撮って見せたVという字は、私たちが訪問している事実（「訪問」の意味です）―後略」

このVサインは九月十四日夜七時三十分頃にフレッドの夫人フィリスとアイアンの二人がティマル・上空で目撃したということです。また X氏の家に二人の見知らぬ人物が現われて、彼らが手紙の主であることをほのめかした事実もあるとフレッドは述べています。その他に多くの報告をフレッドは挙げて、これが真実の宇宙人であることは間違いないと強調していますが、このX氏事件に関してアダムスキは断固たる態度で、これがニセ宇宙人の仕業であることを言明し、九月十八日付のフレッド宛の手紙には次のように述べています。

「……宇宙人はX氏の体験を支持していません。そのことはX氏が悪いという意味ではなく、何者かに騙されていたことを意味します。私でさえも事情をもう少しよく知らなかったら、やはり騙されたかもしれませんが……」そして、今やサイレンス・グループの活動がクライマックスに近くなったこと、われわれはニセ宇宙人に極力警戒しなければならないことなどをアダムスキはつけ加えています。また、アダムスキが八月二十五日付で私宛によこした私信のなかにも「X氏については、それもまた貴重のコンタクトではありません」とありました。

相手としましてはやはり文氏を支持する気持は拒りません。CBAのケイスによく似ていますが、これはやはりサイレンス・グループの巧みな主者としか思えず、どうも不気味なものを感じさせられます。文氏のコンタクトした宇宙人なるものも同じく大変災発生時のグループ救出計画を伝えているそうですが、これを聞けば大抵おわかりでしょう。第一、月には空気も水もないという断言がおかしなことで、これは地球のロケット類による調査で最近は月には多少の空気や水があるらしいということが科学上で大っぴらに認められてきたことから考えても不合理です。氏宅は忘れましたが、米国の或るアマチュア天体観測家は昨年の或る夜、望遠鏡で月面を十数時間も眺め続けた結果、不明瞭な光る物体が月面上を移動するのを目撃したということを日本の天文学者が発表している記事を読んだことがあります。その他最新の科学上の新発見などを検討しても、やはり「月は生きている」としか思われません。空気も水もないというのは五、六十年前の古典天文学の説です。それを巧みに利用したところに何かの詐術があるような気がします。夜空に光る物体が字を描くくらいのことは最近の進歩した無線操縦の模型飛行機を用いて簡単にやれることです。そのようなあやふやな目撃体験よりも今のところはコンタクトマンのもつ思想、哲学といったものの内容を重視するほうがより合理的のように思われます。当のフレッド自身は必ずしもアダムスキを攻撃し始めたわけではなく、両者を客観的に観察して、とにかく地球人自身の科学的調査の結果を忍耐強く待つことにしようという意味のことを云っていますが、内心では文氏支持に傾いていることは明らかで、世界G・A・Pの連絡網からかなり軌道をはずれてきたと云ってよいでしょう。このような協力者は他にも数名あり、そのことをアダムスキは〝地獄の主〟がそのアゴで食ってしまったと表現したわけです。

◎ベルギー　メイ・モーレー女史

アントワープに住む右の人から十二月十日付で始めてニュースレターが到着しましたので読んでみますと、最近ベルギーG・A・Pの主宰者になったので宜敷くという挨拶状と自己紹介でした。デンマークのピーターセン大尉、スイスのルウ・ツィンシュタック女史などと知合だということで、文面によりますと「数年前私はベルギーで内密に興味をもつ者は私一人くらいのものだろうと思っておりましたが、まもなく他にも興味をもつ人々がいたことを知り、その問題について話しあいました」とありますので、まだあまり活発な活動は行なわれていないようです。

以上の他に世界G・A・Pの協力者またはそれに準ずる人々を主な人をあげますと次のようになります。

◎ブラジル　ヴァルター・ビューラー博士
◎ニュージランド(北)　ヘンク・ヒンフェラー氏夫妻
◎オランダ　レイ・ダクイラ女史
◎インド　S・K・マイトラ博士
◎イタリア　アルベルト・ペレゴ博士
◎スイス　ルウ・ツィンシュタック女史
◎イギリス　J・レズリー・オトレイ氏
◎ドイツ　カール・ファイト氏

これらの人々は各自で研究グループをもち、機関誌を発行したり、ニュースレターを交換し合ったりして、主としてアダムスキ研究を行なっている人々です。他にもまだいますが、私が確実に連絡を保っているのは以上の協力者たちです。

編集後記

◎ 各方面から寄せられました絶大なる支援に厚く御礼を申し上げます。今回は正月の休暇が少なくありましたので、頁数を増やすことができました。これからは追々雑誌のかたちにしたいと思っています。誌代を決めてくれと申される方もありますが、これは私が全く奉仕的にやっている仕事でありまして、しかもきたないガリ版ではとても誌代などはいただけませんけれども、気のすまない方のために一応送料その他の実費として一部頒価五〇円ということにしておきますから、その旨御諒承されば幸甚です。そのかわり、と申しては失礼ですが、私は最善をつくしましょう。国内のニューズよりも主として海外のものを扱いますが、特にアダムスキ関係ならばいささかの稀少価値はあるだろうと思っています。部数が多くなればタイプ印刷にするつもりです。「誰が幹部で誰がエリートなどということもない、誰もが平等に探求し合い助け合ってゆく理想的な団体にしたらどうか」という卓越した御意見を寄せられた方もありました。団体を作るのは私はコリたのですが、右のような意味ならば甚だ結構だと存じます。それで名称を一応「G・A・P JAPAN」ということにしましょう。呼称は略して「ギャップ」でよろしいと思います。このG・Aというのはジョージ・アダムスキを意味するものではなく、Get Acquainted（知り合いになる、または知る）の意味で、かなり広い意味を含んでいますが、なんといっても「進化した兄弟の存在を知る、または彼らと知り合いになる」ということが才一義のようです。会の規約といったものは何もありません。私は一応主宰者としての責任を負いますが、しかしいわゆる〝幹部〟ではなく、奉仕者であり、いわば斡旋機械です。メンバーの方々はお互いに〝友だち〟と呼び合えば これが先ず最上の呼び方であろうと思います。〝会員〟とか〝試験〟とか〝同志〟という呼称を私はどうも好みません。要はあまり規則にとらわれないで自由に伸び伸びとやることだと考えます。このニューズレターは毎月定期に出すのはむつかしく、多少のズレがありますから御了承下さい。

◎ 目下世界的に円盤問題は複雑怪奇をきわめていますが、しかし複雑になればなるほど自己の思考力を向上させるための材料を提供されることにもなりますので、まさに絶好の試錬の時にあると考えます。世間には円盤問題のことなど何も知らず、非常に狭い知識と思考の範囲内でのみあくせくしている人が多いことを思えば、何の因果からかこの神秘的な問題に足を突込んだ私たちはよほど恵まれていると思います。〝忍耐と沒頭〟の一語につきると思いますが、とにかくこの問題をただの興味や趣味の対象とする時期は過ぎたようで、何か非常に高邁な哲学とつながるものを感じさせられます。イデオロギーの洪水のさなかにあって、個人の自我を滅却させることは容易ではありませんが、たぶん不可能事でもないでしょう。自我は〝存在する〟からです。もともと無いものなら無くすことはできませんが、存在するものなら無くすことができる筈です。お気付きの点や御感想などをお寄せ下されば喜びます。

G・A・P JAPAN ニューズレター No.3
編集発行人 久保田八郎
発行所 島根県益田市益田古川五五三
昭和三十七年一月十日発行 頒価 五〇円